

金賞

揺れ動く街で知った人権の重み

横須賀市立武山中学校三年 八十田 里奈

二〇二四年一月一日、能登半島地震が起き、テレビから流れる映像に私は釘づけになった。そしてそれと同時にあの時の出来事を思い出した。

二〇一六年四月一四日の夜、私は熊本地震を経験した。

突然、「ゴゴゴォー」と大きな音が響いた瞬間、当時小学一年生になったばかりの私はまだ、何が起きているのか理解できなかった。まるで宙を舞っているのかのように私の体は揺れ動き、壁が揺れ、床が波打った。それが何度も何度も襲ってくる。家の中の家具や食器が散乱し、まるでそれは地獄絵図のようだった。私の小さな心は恐怖心でいっぱいになった。この時の記憶は今でも鮮明に残っている。

あの日を境に町は、一瞬で姿を変えた。私の住む町は、辺り一面瓦礫に変わり、そのあまりに変わり果てた姿に、私はただ言葉を無くしたのを覚えている。

それまで当然のように感じていた「安全」や「日常」は全て消えさってしまった。

その後も余震が続き、家での安全が確保できるまで私と母、そして当時二才の弟の三人は狭い車の中での生活を余儀なくされた。父は自衛官の為、長い間現場での任務に従事しており、私達のもとにはいなかった。いつもいてくれて当たり前だった父がいらない事の心細さを忘れる事はない。そんな父は、現場で多くの人達を助け、私も実際にその姿を見て、困難な時ほど、お互い支え合い、尊重し合う事がどれほど重要かを知った。

私の家の近所には、一人暮らしのおばあちゃんが住んでいた。いつも家の前を通ると笑顔で声をかけてくれる優しい人だった。おばあちゃんは足が悪く、避難所での生活がままならず、ライフラインの止まった不

便な自宅での生活を送らざるを得なかった。それを知った近所の人達が、水や食料を届けたり、毎日様子を見に行ったり声をかけ合いながら過ごした。

私も水を運ぶのを手伝ったのを覚えている。水を届けた時、いつものあの笑顔で「ありがとうね。」と言ってくれたおばあちゃんの顔を見て、私も自然と笑顔になり、なぜか不安感や恐怖が和らいだ。

そうやって、皆が自然と支え合い、一人一人の立場を尊重しながら、助け合っていた。それは、普段から地域でのコミュニケーションが取れており、お互いの状況を把握できていたからだと思う。

今、地震や自然災害が頻繁に起こる時代において、私達は今一度、災害時の対応や全ての人が誰一人取り残される事なく皆が平等に支援を受けられる為の仕組み作りを考えていかなければいけないと思う。そうする事が、ひいては一人一人の人権と尊厳を守ることにつながるからだ。

そして、父のように支援活動を行ってくれている人達がいる事を忘れてはならない。地震発生直後から不眠不休の活動が続けていたが、今考えれば、父もまた被災者の一人なのだ。後から聞いた話だが、任務の間、私達家族の事が心配で、頭から離れなかったそうだ。

中学三年生となった今、震災を振り返りあの出来事から学んだ事は、どんなに困難な状況でも希望を持ち続け、周囲と共に支え合う事で乗り越えられるということだ。恐怖や不安の中でも、家族や地域、そして周りで支え続けてくれていた全ての人達がいたからこそ、少しずつ前へ進む事ができた。

人権とは、ただ生きるための最低限の権利だけではなく、私達が互いに尊重し合い、共に生きるためのものだとは私は信じている。

この経験をもとに、私は今後も人権について学び続け、他人を思いやる心、助け合う心を大切にしていきたいと思う。そしていつかどんな困難な状況にも対応でき、「互いに尊重し、助け合う事ができる」そんな理想的な社会になってくれる事を願っている。

銀賞

わたしが私になるために

横須賀市立衣笠中学校三年 児島 詩 希

どうして同じ色の服を着て学校や会社に行かなければならないのだろう。

型ぬきのおにぎりの様に、黒と白の服を着て、個性という中身を隠しているのだろう。「私の中身はコレです。」と誰もが主張できて生きやすい世界になったらいいのに。

小学三年生の時、突然学校に行けなくなつた。何か特別な出来事があったわけではない。友達の事が嫌になつたわけではないし、先生の事が嫌になつたわけではない。

毎日朝になると、頭が痛くなつたり、お腹が痛くなつたりした。

学校を休むと、一緒に住んでいたひいおばあちゃんに「かわいいそうだね」と言われた。

私はかわいそうなのかな。かわいそうと言われ続けると、自分はかわいそうなんだという気分になる。それが嫌で、クローゼットの中で隠れていたりした。

ある日の朝、お母さんと登校した時、先生に呼びとめられて「今度レクリエーション大会があつて、クラス対抗なんです。詩希さんは練習に参加できていないんです。クラスみんな、絶対に優勝するぞという雰囲気なんです。参加どうしますか。」と言われた。優勝するためには、練習していない自分は参加しない方がいいのかなと思つて、休む事にした。先生も悪気があつたわけじゃないと思うけど、違う言い方をしてくれていたら参加できたかもしれないと思つたので、よく覚えていた。

その日から、三年生最後はほとんど学校に行かず四年生になった。

四年生は、分散登校でクラスの人数が少なかったので、新しい先生とも関わる事が多くできて良かった。先生は、アニメや、私が描いた絵の話をしてくれて嬉しかったし、いつも私がどうしたいかを一番に聞いてくれて、その後で先生の意見を言ってくれて、一緒に考えてくれた。

行事や学年レクの時も、

「授業じゃないから、気軽においで。」と言ってくれて嬉しかった。私がいても良いんだと思わせてくれた。

五年生になって、また先生がかわつたけれど、委員会活動の担当がその先生だった。記事を書いて持っていくと、毎回嬉しくなる言葉をくれて、五年生が終わる頃には編集長もやって、みんなからまとめた記事を持っていくと、ありがたうと言ってもらえて、少しだけ自信をもつ事ができた。

私はこの経験から、人の何気ない言葉は、心に積もると自信を奪うおもりにもなるし、自信をくれる力にもなるのだと思つた。

中学の制服を作る時も、ズボンを選ぶ人は学年に2、3人しかいないから目立つと思うと採寸のおばさんに言われたけれど、家族はみんな自分の着たい物を着ればいいと言ってくれた。

中学の先生も、クラスになじめるように声をかけつづけてくれたり、教室にいられない時も相談室に会いに来てくれたり、先生も大変なはずなのに三年間ずっと私の担任を引き受けてくれて嬉しかった。先生が途中で担任じゃなくなつていたらまた学校に行けなくなつて、今の私ではなかったかもしれない。

私が今の私になれたのは、ここまで出会つた人達と側で見守ってくれている人達のおかげだと思う。自分の感情を表に出す事が苦手な私だけけど、本当は思っている事がたくさんあるし、なりたい自分もある。

いつか私がなりたいたい私になつた時、また先生たちに会つて、自分の言葉で感謝を伝えたいと思う。

人と同じ事ができなかつたり、違う考えをもっていたりする人が排除されてしまったらこの世界は中身の無い黒と白の型ぬきおにぎりばかりの味気ない世界になってしまう。

自分と違う人を理解するという事は難しいと思うけれど、理解しようとする事は難しくないと思う。できる、できないではなく、やるかやらないかだと思ふ。

これからの世界がよくなるのなら、やるしかないのだと思う。

誰かを否定したり、比べるのではなく理解し合い、そんな人もいるんだと受け入れる、そんな優しい世界になれば、いいなと思う。

わたしが今の私になるために力をかしてくれた人たち、ありがたう。

わたしはここから、また周りの人の力も借りながら自分でできる事をしつかりと頑張つていこうと思う。

まだ見ぬこれからの私のために。

銀賞

自分らしく生きる

横須賀市立武山中学校三年 岡部 夢音

私は幼い頃から仮面ライダーが好きです。兄の影響もあってか、当時からかわいいものよりカッコいいものが好きだった私は、プリキュアより仮面ライダーが好きでした。

しかし、五歳くらいの時祖母に「女の子なんだから仮面ライダーのおもちゃは買わないよ。」と言われました。これ以来自分の好きなものを否定されるのがこわくて、仮面ライダーを見るのをやめて、次第に自分の好きなものを隠すようになりました。

小学六年生のある日、SNSを見ていたらLGBTに関する動画を見ました。LGBTとはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をとった言葉で、私が見た動画は、同性愛者の人が親にカミングアウトをしたらとても反対された、というものでした。好きなものを否定されるのを恐れて逃げた自分とは違って、結果的には反対されたけど、自分の事を知って欲しい、という気持ちから逃げないでカミングアウトをしていて、私はとても勇気をもらいました。

それから私は、逃げるのをやめて仮面ライダーを見るようになりました。家族からは、「きもい」「いつまでそんなの見てるの」「や「頭おかしい」など、たくさん否定されてとてもつらかったです。しかし、自分の好きなものを隠して過ごすほうがつらいので、いつか家族も認めてくれると信じて、仮面ライダーを見るようになりました。

結局、認めてくれることはなく、今でも、「きもい」などと言われることがあります。こんなにも認めてくれないのは、「男性は青、女性は赤」のような固定観念があるからだと思います。

最近LGBTがニュースなどで取り上げられています。これも、男女

の固定観念が生んだ差別だと思います。「男性は女性を、女性は男性を好きになる」「性別は男と女の2つだけ」などの固定観念があるから、そうではない人を見ると「普通ではない」と判断し、差別をする人がいます。しかし「普通」とは誰かが決められるものではないと思います。同性が好きな人からしたら、それが普通なのに、恋愛対象が同性、ただそれだけで誰かが決めた「普通」とは違うから差別されたり、告白した答えが、好きかごめんだけではなくて、「信んじられない」や「気持ち悪い」、「縁を切りたい」などと言われるのは、あまりにも理不尽で、とてもつらいことです。

誰が何を好きになるかは個人の自由で、誰にも関係ありません。人間、誰一人として同じ人はいないので、好きになるものも、全員違います。しかし、「好き」という気持ちは全員同じだと思います。自分だけの価値観で自由に何かを好きになる。この「好き」に違いはありません。

今の時代、多様性と言われることが増えてきて、テレビや学校の授業などで取り上げられることが多くなり、LGBTの認知度は高くなっていると思います。今では十人に一人と言われているLGBT。それを理解できない人、気持ち悪いと思う人、色々な人がいたとしても、それも多様性です。必ずしも理解しないといけない訳ではありませんが、批判的なことを言うのはやめてください。確かにLGBTは少数で、他人事に聞こえるかもしれませんが、言わないだけで、あなたの周りにもいるかもしれません。「言わない」ではなく「言えない」かもしれません。そんな時に、相手のことを傷つけないためにも、批判的なことは思ったとしても、言わないでください。

人やもの、色や服装、髪型など何かを好きになったり身につけたりすることに、性別や年齢、国籍などは関係ありません。「みんな違ってみんないい」です。そんな世の中にするためには認め合うことが大切だと思います。いつか、全員が自分らしく生きられる世の中になってほしいです。私自身もしっかりと自分と向き合って、誰がどう思うかなんて気にしないで、自分らしく生きようと思います。